

〔随想〕

日本経緯度原点と「天文台」

庭斎（橋内 武）

東京の夜空が澄んで天体観測も可能であった一八八八年（明治二十一年）のこと――

麻布區飯倉三丁目（現・港区麻布台二丁目）に東京天文台が設置された。その跡地には今でも「日本経緯度原点」を示す十字の金属標がある。これは日本全国の国土測量の基準点となった場所である。この原点は、一九世紀末の一八九二年（明治二十五年）に、陸軍参謀本部陸地測量部により東京天文台の子午環の中心に定められた。つまり、千葉県鹿野山の一等三角点などとの間を結んで三角測量をするという、本格的な国土測量が始められたところである。奇しくも、この同じ地点で天文・地文という垂直的な観測と水平的な測量が行われて近代日本の天文学と地図学が始まったのである。

東京天文台が一九二三年（大正十二年）に関東大震災のため三鷹に移転したあと、この麻布飯倉の国有地は、東京帝国大学（戦後は東京大学）理学部天文学教室に転用された。この教室で天体の観測と天文学の研究が続けられたのである。だが、地元ではこの広々とした場所を以前と同様、「天文台」と呼んでいた。都心に近い麻布には昔、大名の江戸屋敷があり、その跡地は各国の大使館になったものもある。だから、今では国際色豊かな「大使館の街」である。ちなみに、わが実家の西隣はロシア大使館（旧ソ連大使館、佐賀鍋島家の屋敷跡）。私の一族は代々飯倉六丁目（現・麻布台二丁目）で生まれ育った。戦後わが家は栃木県芳賀郡市塙の疎開先から戻り、飯倉のW家や旧第三高女の仰光寮での間借り生活を強いられたあと、旧宅の焼け跡に平屋を建て直し



手前に日本経緯度原点、背後に麻布台ビルと東京タワーが見える。左手の建物は国土交通省（旧建設省）狸穴分室。



て移り住んだ。「天文台」は実家の前の凹凸道の突き当りにあった。それが私の「天文台」詣での始まりである。

当時「天文台」には、空襲で焼け落ちた建物の瓦礫が無造作に放置され、焼夷弾が落ちたところには大きな水溜りができていた。そのような戦後の一時期、焼け跡が残る構内には木造平屋のコの字型教室棟や天体望遠鏡が設置された観測台があり、一戸だけあった官舎には藤田良雄教授の家族が住んでいた。藤田家には子どもが三人いて、いつもよく一緒に遊んでいた。そのよしみで天体望遠鏡を覗く機会に恵まれた。子どもの肉眼で見えていた小さな満月が、天体観測用の望遠レンズを通して観ると、ドッジボールよりも大きく見えた。

この高台からは、東京湾に停泊する大型船舶や冬には冠雪した富士山も遠望できた。広い構内に目をやると、浅い池もあった。カエルが棲み、アメンボーやゲンゴローが泳ぎ、トンボやチョウチヨも飛んできた。クローパー（白詰草）が一面に被う原っぱには、バッタやカマキリが跳びはね、元気に遊び回る子どもたちの姿があった。女の子たちは、白いクローパーで髪飾りや腕飾りを編み、「レンゲのうた」のわらべ唄を歌いながら輪あそびを楽しんでいた。

ひいらいた、ひいらいた

なんの花がひいらいた レンゲの花がひいらいた

ひいらいたと思つたら、いつのまにかつうぼんだ

他方、男の子たちはクローパーの花を絡ませて引つ張り合う草相撲に興じた。西や北の隣地に近いところに

は、ケヤキが高く伸び、木イチゴのような灌木が茂っていた。南面の雑木林の向うにはスリル満点の急な崖やほの暗い洞穴まであったから、腕白者には木のほりや探検ごっこができる格好の遊び場であった。正月には凧揚げに興じ、春にはツクシ摘みをし、夏にはセミを追いかけて、木イチゴを採っては口にはうばったのである。

その後、一九五五年（昭和三十年）頃には天文学教室が他所へ移転し、この高台は関東地方財務局の管理下に置かれたが、しばらくは空き地同然であった。古い木造教室や天体観測用の小屋は朽ちるままになっていた。だから、「天文台」は子どもたちにとって無類の遊び場であり続けた。彼らは自由に跳びはね、走り回った。

原っぱも以前同様、常緑のクローバーで被われた自然のしとねであった。大人にとっても子どもにとっても、ここはすばらしい見晴台であった。朝日の出る方角には東京湾の海面が銀色に輝き、夕焼け空の下には秀麗富士が灰色に沈んでいた。南の崖からは、三田の東京済生会病院や慶応義塾大学が指乎の間に見えた。眼下の国道一号線を走る車の数は、今よりもはるかに少なかった。

ところが、一九六〇年代の高度経済成長期には都心の再開発が急速に進んだ。この土地には麻布台ビル二棟（ラジオ関東〔現・ラジオ日本〕や全国地方競馬協会などが入居）と中央官庁合同会議所（建設省分室を含む）が建てられ、すっかり様変わりした。芝公園に作られた東京タワー（一九五八年十二月完成）もすでにランドマークになっており、この都心に近い国有地に残っていた自然もまたたく間に失われたのである。あれから四十数年。この二〇〇八年（平成二十一年）には改築の結果、中央官庁合同会議所が、鉄格子で囲まれた駐日アフガニスタン大使館（次頁上の写真）に生まれ変わった。だから、もはや近所の住民が自由に立ち入ることができない治外法権の場になってしまったのである。

あの「天文台」の高台からは、とうに東京湾や富士山の眺めも失われた。子どもたちが遊んだ池も原っぱも

日本経緯度原点と「天文台」



2008年完成の駐日アフガニスタン大使館



1958年頃天文学教室前で遊ぶ幼な子

のマンションやオフィスビルが林立し、人工的な空間が広がるばかりである。けれども、頭に霜を頂く歳になった私にとっては、あの広々とした緑の高台は今でも唯一無二のサンクチュアリであり、過ぎ去った子ども時代のパラダイスとして、ときおり脳裏に鮮やかに浮かび上がる。

——日本経緯度原点が残る「天文台」跡地こそ、近代日本の天文学と地図学の原点であると同時に、わが個人史の原点でもある。

崖も洞穴もない。天体望遠鏡を覗いた遠い思い出が残るのみである。北隣にあった穂積重遠邸の跡地には「麻布台タワー」と称するマンションが建設された。西隣にあった旧満鉄倶楽部の土地はアメリカンクラブが所有するところとなり、無機質なビルが二棟が建てられた。それら二棟も二〇〇八年には解体されて、麻布二丁目計画（設計・三菱地所）が進行中である。この近辺には、高層